

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	前號の『熊谷直實』を讀みて：批評
Author(s)	馬山生
Citation	龍南會雜誌， 2 1： 3 6 - 4 1
Issue date	1893-12-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4154
Right	

奇石欲飛樹欲開。幾重坂路往如還。楓雲十里潺湲水。霜後嵐山髣髴間。

遊跡觀楓

楓林織錦艷於春。寂々空村風景新。忽怪朝存焚葉跡。前宵知有駐車人。

樋田洞門

水洗巖根東又西。天邊奇石是雲梯。洞門深邃殊清絕。人帶烟霞入馬溪。

批評

前號の『熊谷直實』を讀みて

馬山生

愛山一流の新文体を以て、華やかに打て出でられたる新文人小原之正君が、前號の『熊谷直實』の如きは、蓋し本會雜誌に出でたる名文の一あるべきか。吾人は人物を畫くの文を以て、作るに面白く、讀むに面白きものありと思ふ。而して讀者を益するの點にありても、人物を畫くの文は、遙に、山を畫き川を畫き若くば花鳥風月を畫くの文に超越せるものありと思ふ。吾人は茲に特に人物を畫くの文と云ふ。蓋し人物を評し人物を論ずるの文は、吾人の茲に言はんと欲する所にあらざればあり。

人物を畫く、蓋し其人物を世に紹介せんと欲すればあり。故に之を文筆に畫かんとする人物は、之を世に紹介するに足る程の價值を有せざるべからず。即ち、其人物の特質特性を發揮せざるべからず。

英語の所謂キヤラクタリスチック是れあり。若し夫れ特質特性の言ふべきものなくんば、例令巧みに其人物を畫き來るも、蓋し徒勞のみ。徒らに文筆を弄するの徒のみ。吾人は取らず。

熊谷次郎直實、由來彼は髣髴たる幻影たりしなり。彼は幾多疑問の裡に彷徨したりき。或者は認めて剛膽となし、或者は認めて卒直となす。社會の多數は彼を以て、一個關東の田舎武者視したりき。而して彼が出家の原因は、單に彼が敦盛を打ち取りたる際に於て、偶然起り來りたる菩提心よりするもののみ思はれたりき。晩年に至りて、纔に物の哀れを感じる一武夫たるに過ぎむとのみ思はれたりき。何ぞ知らん。頑たる怪巖、僅に其上に一花片を戴けりと思はれたる熊谷直實は、恰も雪の如く、其寒天に乗じて降り來るや。槎枒たる老幹をも壓し折くべき勢を有ちながら、和風一吹、優然溶け去りて痕あきに至るが如き、多情多血の眞武人あらんとは。

熊谷直實は、確に、世に紹介するに足る程の價值を有せり。彼が特質と特性とは、之を世に發揮し、劇の直實を見て、未だ眞の直實を見ざる、世人の多數に示さるべからず。熊谷直實に同情を表する情の人は、彼が爲めに筆を執るとを躊躇せざるべきなり。斯くて小原君の『熊谷直實』は出でしものか。』君は熊谷直實を畫くに當り、讀者をして最も解明し易からしめんが爲め、先づ二ヶの問題を提出せり。曰く、平氏の彼、何を以て源氏と與せしか。曰く、功名他人に譲らざりし彼は、何故に飄然として佛界に逃れし。君は一々仔細に之を對へ去り、更ら傍ら數條の疑問を解釋せり。曰く、彼の家系は如何。曰く、彼の父母は如何。曰く、彼の家庭は如何。而して其家系と父母と家庭とは、彼の一生に幾許の影響を爲せしか。曰く、彼の特質は如何。曰く、女々しき彼、何を以て戰場には勇進直前せしか。曰く、彼が出家後の閑日月は如何。吾人は君の文に依り、遺憾なく、一々其明解を得たり。蓋し文脈整然たればなり。

我謂へらく、情に富めるの人は、恰かも張り詰めたる琴線を胸中に藏するが如きなり。此琴線や、物

に觸るれば直に音を發す。而して、木に觸れたると、石に觸れたると、強く鼓せられたると、軽く鼓せられたると、皆其音を異にするあり。若し夫れ、一時に之を鼓すること激甚ありしとせん。琴線直に斷ちて、亦音を發するさきよ至らんなり。情の人、物に觸れて直に感ず。其感や、其之を興奮する所のものにより、著しく強弱を異にすと雖、若し夫れ、之を刺激する所のもの、一時に激甚透徹なりしならん、失望落膽、然らずんば望を人世に絶ちて、終に靜寂に歸するよ至らんなり。熊谷直實の如き、蓋し此類なり。小原君曰く、直實は情の人なり、涙の人あり、彼を生せしも情あり、彼を死せしめしも情なり、と。君も亦、直實胸中の琴線を解すと云ふべし。

君の文章、僅に七頁に足らざる短篇なれども、頗ぶる直實を畫き得たり。其文章には、妙處甚はた少からず。殊に其結末、直實遁世の處に至り、彼れの達觀より、遂に笑うて起ち、笑ひ笑うて山河を跋涉し、心靜ろに眞如を味ふの處、幾たび讀むも終に倦むことを知らざらしむ。而して只彼が出家當時の心境を寫きて、更に彼が遁世以後の情狀を述べず、之を讀者の想像に一任せし所、頗る奥ゆしく、直實の人品をして、數等高からしめるの感あり。

君は曰く『是に於て彼は笑ふて起てり、……彼は心靜かに蓮の花の淨き香りの内に、照りわたる眞如の月影を見て微笑を湛へぬ』と。更に一轉し、(全文の意を綜合し)『嗚呼彼は涙の人ありしなり』と云ふ。笑と涙、是れ明に非常の矛盾なり。矛盾撞着、豈尋常一樣の矛盾撞着なりとせんや。此矛盾、君は意ありて爲せしや、將た然らざりしやを知らずと雖、吾人は此矛盾が大に文勢を助け、直實の人物をして、更に明亮ならしめしめしを謝せざるべからず。蓋、情の人能く笑ひ能く泣く。其轉する甚はた速かあり。恰も琴線が、時に切々とあり、直に變じて嘈々とするが如きを以てあり。

吾人は本會雜誌が、君の如き新文人を紹介するを得たるを喜ぶ。吾人は君の甚だ斯道に有望あるに驚嘆す。之を喜び之を驚嘆するが故に、敢て君の爲めは細少の缺點を指摘せん。

一、文字の華に失するにあり

文家は常に其題目の人物に對して同情を表せざるべからず。唯夫れ

然り。是を以て、讀者をして又此に同情せまむ。即ち、直實の怒る所、君も亦怒らざるべからず。直實の笑ふ所、君も亦笑はざるべからず。直實の泣く所、君も亦泣かざるべからず。彼が蹶起する所、君も亦蹶起せざるべからず。彼の奮戰決闘する所、君も亦勇心勃々たらざるべからず。彼が靜寂ある所、君も亦靜温あらざるべからず。吾人は此同情の君にありやあしやを疑ふなり。君の文章の餘りに華やかあるが爲め。

又君は其文章を華やからしむるが爲め、全く同意味ある幾多の辭句を、重複連用せる處多し。是れ文家の最も忌む所。情緒纏綿の處は於ては、或は之を恕すべし。文勢然らしむる所、或は之を恕すべし。其他の個處に於ては、徒に讀者を煩冗からしむるのみ。徒らに文氣を衰へしむるのみ。華やかある文を以て、喜ぶべき事物を寫す、恰も燦爛たる錦繡を以て寶玉を包むが如し。吾人は常に、錦を以て玉を包むの人よりも、寧ろ質素ある布帛を以てするの人を敬重す。

二、考證の狹きにあり

吾人は只何となく考證の狹さを覺ゆるのみ。狹さが故に何れの點に誤まれ

り、將た何れの事を漏らせり、と明示する能はずと雖、直截に云へば、君は只重に源平盛衰記を取り、

其他は只一二の考證を爲せしに過ぎざるやの感ひらしむ。直實遁世後の閑日月の如き、君は之を讀者の想像に委ね。文に非常の妙を覺へしむと雖（前に云へる如く）、若し其間に更に記すべきあり、直實の人物をして、更に明亮あらしむるものあらば、君は將に何れを取らんとするか。君は記傳体を用ゆ。

精密に彼が出生の時日を示せり。而して文の最後『彼は何年何月某の日を以て、某の地に於て靜かある大往生を遂げたり』(君の口調を用ゐば)とあらざりしを惜む。吾人は君の文により、既に隴を得たるが爲め、更に強て蜀を望まんとするあり。

三、文字、妥當あらざる所あり 其最なるものは、『送りし贈物』の如き、『來り戦べく云々』の如き、

『強ひて許されざりき』の如き、『彼を死せしも情あり』の如き、又『社會の光明よりも暗黒を多く見ぬ』の如き。

四、情の盡さざる所あり 吾人は世人の如く、直實の佛界に遁れしは、單に敦盛の最期に由りて、無常を感じたるが爲ありとは思はざれども、主因は實に此に存することを信するあり。然れども、君は此點に一の重きを置かずして『嗟呼朝に榮花を開くもの。暮に無常の風を傷み、昨は千金の家に誇る輩、今は有漏の露に化す。彼果して此に見るありし乎、彼は忽ち無常を悟れり』と云ひ、『悲絕慘絶の大活劇を目撃したる彼は益々無常を悟れり』と云ひ、特に義經が昨日は三軍の叱咤したる身を以て、今は猜忌の惡魔に追はるゝを見て、非常に其心を刺激せりとあせり。而して君は彼が萬物皆空の理を覺りたる初をば、彼が一の谷の城下よ於て、平家の上臈の吹きすさめる笛の音を聞きたるに啓くとあせり。是れ大に其當を得たり。而して其翌敦盛の遺骸を檢し、其腰に挟める漢竹の名笛を見て、彼の如き多血の人が一も前夜の笛聲を懷はざりしは如何。吾人は思ふ、彼が佛界に遁れんとするの心は、其端を城下笛聲を聞くに啓き、花の如き若武者敦盛を打取りたるに激し、更に其腰にせる名笛を見て、端なく前夜の事と相應じ、更に修羅の巻に生者必滅盛者必衰の理を實見せるに成ると。若々然らずんば、義經の末路に非常に心を痛めたる彼の如き多情家が、初め宇治川より轉戦して粟津に到れると

き馬工丁を従めて澤にたる木下事件昨日まで畿内人なき旭將軍の最期を見て、焉くんぞ彼の琴線を挑發せざらんや。飯令此時、怨を平家よ報いんとするの情火猶ほ熾かりしとは云へ、焉くんぞ悲觀の端を此に發せざらんや。

吾人は君の如き好文友を得たるを喜ぶ。斯道の爲に自愛せよ。妄批當を失す。多罪多罪。

雜報

○天長地久

鳴鶴天に翔る、蓋玄太平を謳ふか、遊龜巖に翔る、蓋玄治世を樂むか。

恭玄く惟るに、明治第一年、今上陛下、登極あらせられしよし、茲より二十有六春秋、五教を布き、九功を叙し、夙に百姓を平章し、又た萬邦を協和し玉ふ、黎民德に浴し、於變時雍、茲は天長の佳節に遇ひ、感喜何ぞ堪へん、誠惶誠恐、謹めて 寶壽萬歲、天祚萬歲、を祝し奉る。

○公開狀

小生本日神田區一ツ橋通町高等師範學校附屬學校構内へ引移候間此段御通知申上候
十一月十二日

龍南會御中

嘉納治五郎

○各部彙報

●擊劍部は舊に依りて盛なり

●柔道部は一月五日紅白勝負を開く不相變勇壯